男結びは世代をつなぐ

冬囲いの時期になると思い出される。父から教わった男結びだ。

農家の生まれなので、中学生の頃、手ほどきを受ける。一升ビンの胴周りを利用して荒縄で練習する。父は、私の背中越しに手を取って荒縄の結び方を繰り返し教える。どうにか結ぶ手順を飲み込む。自分ひとりでやってみる。結んだ荒縄を持ち上げると、一升ビンは荒縄の間からすり抜けて落ちる。何度やっても落ちる。自分の不甲斐なさで落ち込んでしまう。だが、生来負けず嫌いなので、暇さえあれば男結びに挑む。ある時、結び目をおさえる左手の指が緩むと結び全体が緩むことに気づく。とたんに一升ビンはすり抜けて落ちなくなる。荒縄を揺らしても落ちない。「やった！」天にも昇る心地だ。それからは、父の農作業を手伝いながら男結びに磨きをかける。

今では、庭木の冬囲いや畑での野菜作りに父から教わった男結びが大いに役立っている。男結びなくしてこれらの作業は進まない。

私が父から教わったように父も祖父から教わった。祖父も曽祖父から教わったことだろう。このように男結びは、延々と世代をつないできた。私も息子に祖先からの知恵を伝えて世代をつなぎたい。